

古代エジプト新王国時代に流通した寸胴形アンフォラ に関する一考察

有村元春

はじめに

2つの把手を有し、主に液体の輸送に用いられたと考えられるアンフォラは、古代の東地中海周辺地域で広く生産されていた。中期青銅器時代には、いわゆる「カナーン壺」がレヴァント地域で生まれ、エジプトでも新王国時代になるとアンフォラ生産が本格化する。エジプトで作られたアンフォラは、当初は「カナーン壺」の模倣に過ぎなかったが、次第に独自の発展を遂げてゆく。具体的には、器形が細身の底すぼみ形に変化する。そして、細身の底すぼみ形に変化していくいっぽうで、胴部から底部にかけての幅にあまり変化がない寸胴形のアンフォラも流通するようになることが知られている。寸胴形のアンフォラの出現は、当時のエジプトにおける経済活動を考えるうえで重要だが、底すぼみ形のアンフォラから分化していく背景や、器形変化の過程については、未だ明らかとなっていないことも多い。そこで、本稿では寸胴形のアンフォラの出土例を改めて整理し、その出現の背景や発展の過程に迫っていきたい。

1. 新王国時代のアンフォラ概観

(1) アンフォラの種類

寸胴形のアンフォラに焦点を当てる前に、まず新王国時代に流通していたアンフォラについて、簡単にまとめておく。まず、新王国時代のエジプトでは器形・胎土ともにさまざまな種類のアンフォラが流通していた(図1・2)。ナイル川流域で生産される場合、胎土はナイルシルトとマルクレイのいずれもが確認されている。また、ナイルシルトとマルクレイが混ざった「混合胎土(Mixed clay)」のアンフォラも生産された。ナイル川流域からはやや離れるものの、西部オアシスやシナイ半島で作られたアンフォラも流通していた。

(2) アンフォラの内容物

新王国時代のアンフォラは、ワインを輸送・貯蔵するのに用いられていたケースが多数確認されているため「ワイン壺」と表現されることが多い。ただし、ワイン以外にもビール・牛乳・蜂蜜・油・軟膏・肉・鳥・魚・麦・豆・果物なども入れられていたことが明らかになっている(Wood

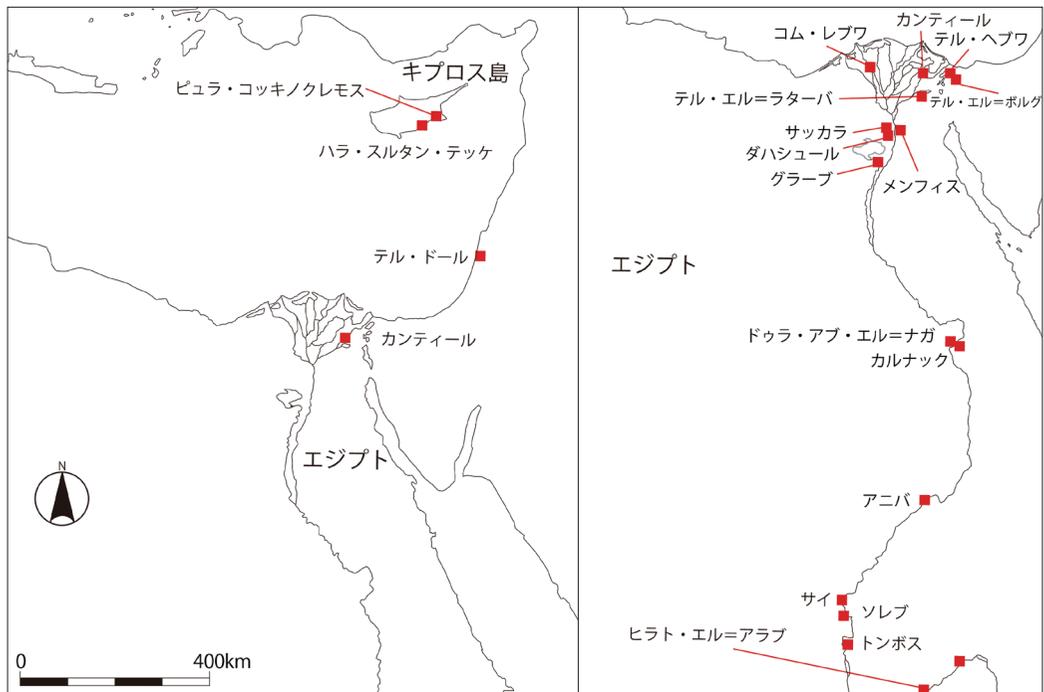


図1 本稿で言及する遺跡（筆者作成）

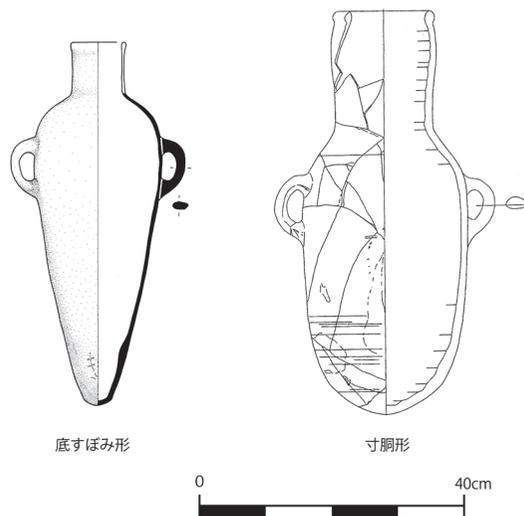


図2 エジプト製アンフォラの例
(Aston 1998, no.1994; Schreiber 2008, pl. xviii.34)

1987: 76)。アンフォラの内容物を把握するうえで重要なのが、いわゆるヒエラティック・ドケットである。ヒエラティック・ドケットとは土器の肩部や胴部に記された文字のことで、内容物の種類やその量が示されていることが多い。

2. 寸胴形のアンフォラに関する先行研究

(1) 特徴と分類

新王国時代に寸胴形のアンフォラが流通するようになることは19世紀末には既に把握されていたが、個別の研究対象として俎上に上げられるのは、C. ホープ (Hope) の研究 (Hope 1989) を待つことになる。彼は新王国時代のエジプトで流通していたさまざまなアンフォラを扱い、型式学的な観点から大まかな分類を行った。ここで、寸胴形のアンフォラが第19王朝から流通することが明示された。

ホープの研究をさらに深めたのが、D. アストン (Aston) の論考である。彼は、エジプトで出土しているアンフォラに関する先行研究が少なく、また、胎土への注目があまりなされてこなかったという課題を踏まえ、ホープと同様に新王国時代に流通していたアンフォラの整理を行った。この研究の影響力は大きく、発掘調査で新王国時代のアンフォラが出土するとほぼ必ず参照され、年代決定の根拠とされることが多い。以下、この研究に何度か言及することになるため、論考のタイトルである“Amphorae in New Kingdom Egypt”を踏まえて ANKE と略称する。ANKE においてアストンは、基本的にはホープと同様の器形を対象とするものの、胎土をより重視し、アンフォラをタイプ A～I に分類している⁽¹⁾。胎土ごとにタイプを分けているため、同じような器形であっても分類としては別扱いとなっている場合もある。具体的には次のように分類されている。

タイプ A：レヴァント産胎土 (A1～5 の小分類あり)、タイプ B：マール D (B1～6 の小分類あり)⁽²⁾、タイプ C：マール F (C1～3 の小分類あり)、タイプ D：マール A4、タイプ E：マール A2、タイプ F：マール B、タイプ G：ナイルシルト、タイプ H：オアシス産胎土、タイプ I：シナイ産胎土

これらのうち、タイプ B2～4・D・E・G (のうちの寸胴形器形) が本稿で検討する資料にあたり、以降、寸胴形アンフォラと呼称する。各タイプの詳細については表 1 にまとめた。

(2) 寸胴形アンフォラが出現した背景

底すばみ形のアンフォラからなぜ寸胴形アンフォラが生まれたのかについては明らかになっていない。しかし、出現した背景については説明が難しいという前置きをしつつも、アストンが「ワイン生産地移動仮説」とも呼べる説を提示している (Aston 2004)。具体的には次の①～④の流れが想定されている。①新王国時代のワインは当初デルタ地域西部で作られていて、ワインを入れるマール D の底すばみ形のアンフォラはワイン生産地付近で作られていた。②時代がぐだり

表1 アストンによる分類の詳細 (Aston 2004を元に作成)

	胎土	年代	特徴	その他のコメント
タイプB2	マールD	第19-20 王朝 (ラメセス2 世～セトナクト/ ラメセス3世)	「長い頸部」「はっきりとした船底形底部」	
タイプB3	マールD	第20 王朝 (セトナクト/ ラメセス3世～ラメセス11 世)	「幅広い胴部」「幅広く、丸みを帯びたほぼ洋梨形の胴部」「丸底」	第19 王朝に年代づけられる資料はない。
タイプB4	マールD	第20 王朝	「とても大きなアンフォラ」	カンティールとテル・エル＝ヤフーデーヤの資料のみしかなく、器形の発展の過程については不明。
タイプD	マールA4	第19-20 王朝 (ラメセス2 世～ラメセス7 世?) ※はっきりと明示されているわけではない。	「マールD のアンフォラの模倣」「波状の頸部」「卵形の胴部」「丸底」	
タイプE	マールA2	第20 王朝 (ラメセス4 世～ラメセス7 世?) ※はっきりと明示されているわけではない。	「マールD のアンフォラの模倣」	
タイプG	ナイルシルト	第18～20 王朝	「G6a 以外のナイルシルトで作られたアンフォラ」	タイプB4 にとって代わる。第20王朝後期になると意図的にナイルシルトを選択したアンフォラ生産が行われる。これは、マールD・混合胎土が取れなくなったためである。

第19王朝になるとワイン生産地がデルタ地域東部に移動する。③これと期を同じくして東部で採れると考えられるマール F の底すぼみ形のアンフォラが大量に作られるようになる。④ワインを入れることが多かったマール D の底すぼみ形のアンフォラの需要がなくなり、ワイン輸送・貯蔵とは異なる用途のために寸胴形アンフォラが開発された (Aston 2004)。では、いったいどのような目的で寸胴形アンフォラが開発されたのか。その目的としてアストンが想定しているのが、いわば「聖水」の輸送である。サッカラで出土した資料に記されていたヒエラティック・ドケットには、クソイス (Xois) などデルタ地域の「水」が記されている (van Dijk 1992)。クソイスの水は葬送儀礼で使われていたとされており、その水の輸送が、寸胴形アンフォラとして最初に現れるタイプ B2 を発展させたとアストンは述べている (Aston 2004: 193)。また、エンバーミング・カシュ⁽³⁾で出土した事例をもとに、寸胴形アンフォラが葬送儀礼用の機能を有していたことも指摘されている (Helmbold and Fischer-Elfert 2016)。

3. 寸胴形アンフォラ再検討の必要性

寸胴形アンフォラが出現する背景や器形が発展していく過程については明らかになっていない点も多いが、ANKE の発表以降、資料も増加する中で、それらについて考察できる資料が増えてきた。また、ANKE は寸胴形アンフォラについて最も詳しく言及しているものの、資料を網羅的に集めたいうで記述されているわけではない。特にヌビア出土資料についてはほとんど参照されていないため、記述が偏っている部分がある。そのため、出土資料と照らし合わせたときに、齟齬が生じることがある。たとえば、アストンの分類でいえばタイプ G の資料について「胎土はアストンのものとは異なるが形はタイプ B2 のため、タイプ B2 の時期に年代づけられる」といった指摘がなされている (Budka 2017: 118)。このように、寸胴形アンフォラを考えるにあたっ

て重要となるアストンの分類および編年に関しては、再検討の必要があるといえる。

そこで、本稿ではまず寸胴形アンフォラを網羅的に集めることで、研究の前提となる寸胴形アンフォラの器形・胎土・流通時期⁽⁴⁾といった基礎情報を更新する。そして、そのうえでアンフォラの内容物や利用方法についての検討を行い、寸胴形アンフォラ出現の背景にも迫っていきたい。

4. 対象資料と器形分類

(1) 対象資料

本稿で検討する対象となるのは、ANKEのタイプB2～4・D・E・G（のうちの寸胴形器形）の器形のアンフォラである。参照するのはナイル川流域・西方砂漠・シナイ半島・レヴァント地域・キプロスで出土している資料である。完形資料でなくとも、器形が推定できるものについては、本稿での議論で取り扱うこととする⁽⁵⁾。また、本稿ではアストンの分類を踏まえつつ、器形をベースに便宜的に6つのタイプに分類し、検討を進める。各タイプについて、表2及び図3にまとめた。

まずは、これらの器形の流通時期・胎土について検討していく。胎土の表記はウィーン・システムでの表記にのっとり⁽⁶⁾。また、ウィーン・システムには存在しない胎土のうち、G6aとG6bについては、まとめて混合胎土として扱い、マールFと呼ばれることが多い胎土については、そのままマールFとする。

表2 本稿における寸胴形アンフォラの種類（筆者作成）

	頸部	胴部	底部	ANKEとの対応
タイプ1	長い頸部をもつ。	最大径が胴部中央付近ないし中央より上に位置する。	船底形	タイプB2
タイプ2	長い頸部をもつ。	最大径が胴部中央より上に位置する。	丸底	タイプD. a, c
タイプ3	長い頸部をもつ。	最大径が胴部中央よりも下に位置する。	丸底	タイプB3
タイプ4	長い頸部をもつ。	最大径が胴部中央よりも下に位置し、零形を呈する。肩部の張りは極めて弱い。	丸底	タイプG. d
タイプ5	タイプ1～4と比べ、胴部の長さに対して短い頸部をもつ。	最大径が胴部中央付近ないし中央より下に位置する。	丸底	タイプD. b
タイプ6	タイプ1～4と比べ、胴部の長さに対して短い頸部をもつ。	器高に対して幅広。最大径は胴部中央付近ないし中央より上に位置する。	船底形・丸底	タイプB4

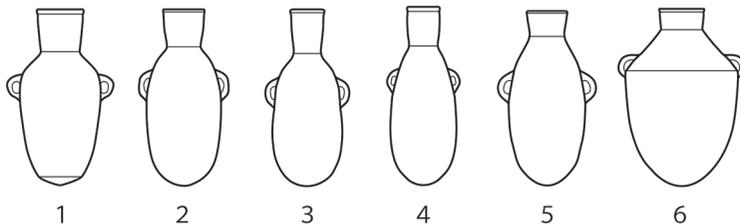


図3 本稿における寸胴形アンフォラの種類（筆者作成）

5. 編年の再検討

(1) タイプ1 (図4)

ANKE ではラメセス2世の治世に出現するとされたが、明確にホルエムヘブの治世に年代づけられる混合胎土のアンフォラがサッカラ (Saqqara) で出土している (Bourriau et al. 2005: 68-69, fig. 36)。いっぽうで、第19王朝に年代づけられる資料が多いのは確かである。流通時期の下限を考える上で重要なのは、テーベ (Thebes) 西岸のシプタハ墓の前で出土した、第19王朝後期から第20王朝のラメセス3世の治世頃に年代づけられる土器群の中に含まれている資料である (Aston 2014, pl. 53, 54)。この資料から、タイプ1のアンフォラが第20王朝の頃にも流通していた可能性を指摘できる。

また、アストンのタイプB1 (底すぼみ形のアンフォラ) からの変化の過渡期に相当すると考えられる資料が、メンフィス (Memphis) のコム・ラビア (Kom Rabia) の第18王朝中期から後期に年代づけられる層や (Bourriau 2010: 161, fig. 42. 10.14.1)、テーベ西岸貴族墓でも出土している。後者はアメンヘテプ3世の治世まで遡る可能性がある (Schreiber 2015: 25, pl. v. 1.2.38)。また、テル・ヘブワ (Tell Hebwa) で出土したアメンヘテプ3世からホルエムヘブの治世の間

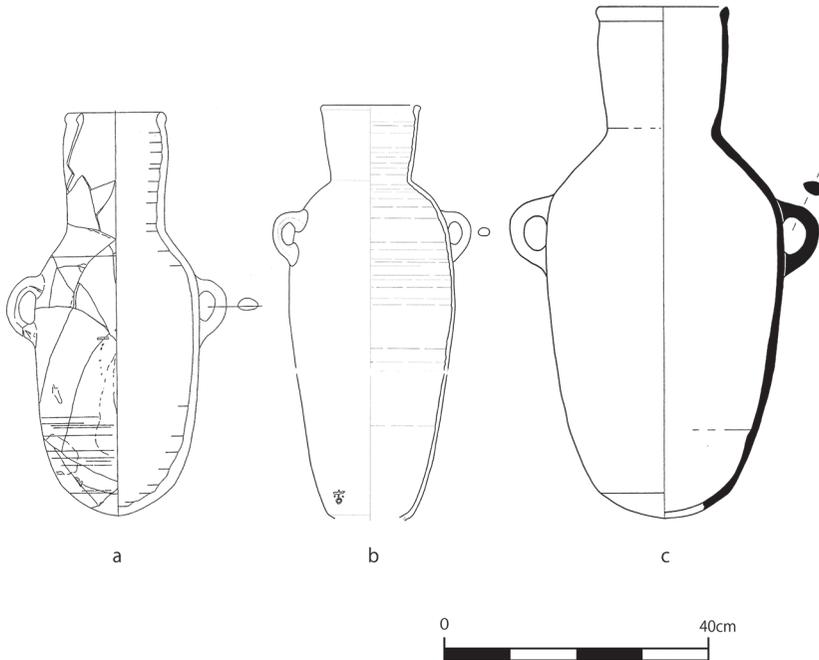


図4 寸胴形アンフォラ：タイプ1の例

(a=Schreiber 2008, pl. xviii.34; b=Takenouchi and Takahashi 2020, fig. 13.81; c=Aston and Pusch 1999: 47. 13)

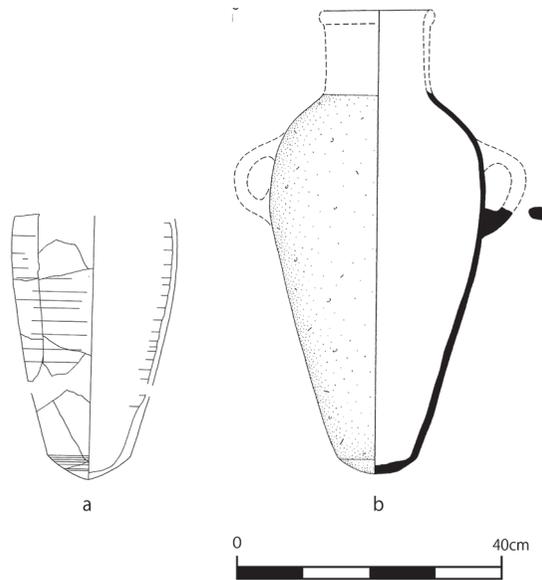


図5 底すぼみ形のアンフォラから寸胴形アンフォラへの過渡期の資料
(a=Schreiber 2015, pl. v. 1.2.38; b=Aston 1996 pl. xviii.34)

に年代づけられる資料も、底部の幅がやや広く、寸胴形アンフォラへ変化する過渡期の資料と位置づけられる(図5)。

胎土に関しては、ほとんどがマールDか混合胎土、つまりエジプト北部で採取されると考えられるものだが、南方由来のマールA4のアンフォラも存在している(e.g. Aston 2011: 215, fig. vi: 9; Aston 2014: 65, pl. 53. 448)。

(2) タイプ2 (図6)

ラメセス2世の治世に年代づけられる資料がカンティール(Qantir)で出土している(Aston 1998: 436-437)。また、20世紀初頭の発掘報告書では、この土器は第19王朝のものとして扱われているものの、アストンによる出土資料の再検討の結果、全て第20王朝に年代づけられるとされた(Aston 2004: 193)。

テーベ西岸のラメセス7世墓ではマールA2・A4のものが出土している(Aston et al. 1998: 161, pl. 39, 40.336)。ヌビアでも多く出土し、マールA4で作られることが多い(e.g. Minault-Gout and Thill 2012)。テル・エル=ボルグ(Tell el-Borg)で出土している混合胎土の資料は、このタイプと考えられる(Hummel 2014: 394, pl. 16: 3)⁽⁷⁾。第20王朝に年代づけられるマールDの資料も出土している(Schreiber 2015, pl. xvii.1.4.54)。

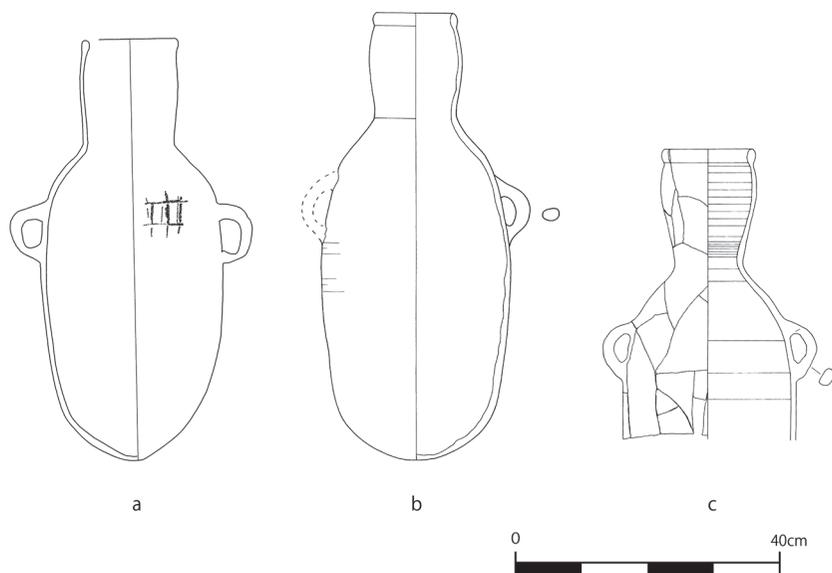


図6 寸胴形アンフォラ：タイプ2の例

(a=Aston and Pusch 1999, no.49; b=Aston et al. 1998, pl. 39; c=Schreiber 2015, pl. xvii. 1.4.54)

(3) タイプ3 (図7)

タイプ3のアンフォラのなかで最も古い可能性があるのが、セティ2世からラメセス3世の治世のどこかに年代づけられるマールDの資料である (Aston and Pusch 1999: 64, no.40)。この資料から、タイプ3のアンフォラが第19王朝に流通していた可能性が指摘できるが、今のところ確実に第19王朝に年代づけられる資料は確認されていない。

アストンはマールDで作られたこの器形のアンフォラの流通時期の下限をラメセス3世の治世としているが、ドゥラ・アブ・エル＝ナガ (Dra abu el-Naga) では、ラメセス11世の治世に年代づけられるコンテキストからこのタイプのアンフォラが出土している (Michels 2016: 407-408, fig. 11)。ヒラト・エル＝アラブ (Hillat el-Arab) 出土のマールA2・A3・A4の資料をはじめとして、ヌビアでも多数出土しているが (Vincentelli 2006)、時期を特定するのは難しい⁽⁸⁾。また、サイ島 (Sai) ではナイルシルトで作られたものも出土している (Budka 2021: 234, fig. 7.52)。

このタイプのアンフォラはキプロスにも輸出されている。たとえば、ハラ・スルタン・テッケ (Hala Sultan Tekke) では、第20王朝と並行する時代に年代づけられるコンテキストから、混合胎土の資料が出土している (Eriksson 1995: 201; Bourriau et al. 2000: 18)。

(4) タイプ4 (図8)

タイプ4はいくつかの遺跡で出土していることが知られているが、詳細に報告されている例は少ない。まずは、ラメセス7世墓で出土しているマールA4のアンフォラがこのタイプに相当す

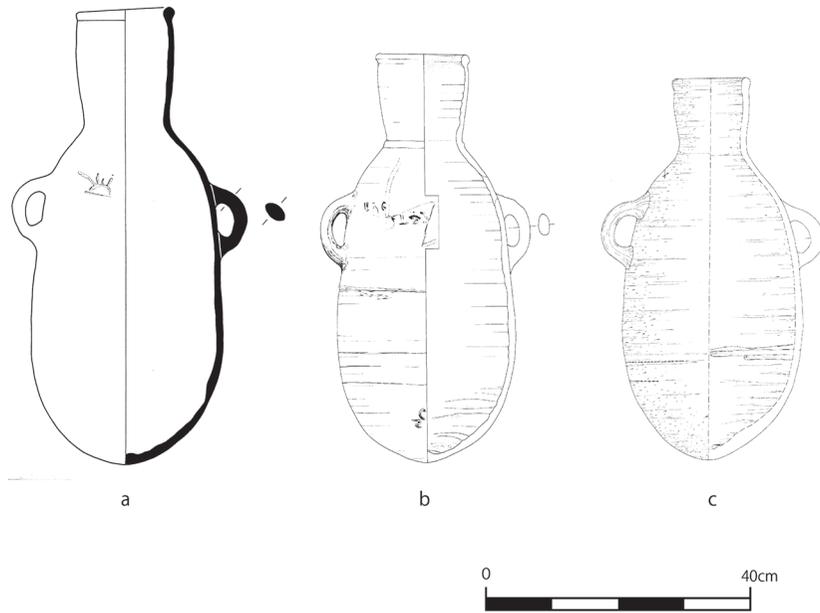


図7 寸胴形アンフォラ：タイプ3の例
(a=Aston and Pusch 1999, no.40; b=Michels 2016, fig. 11; c=Budka 2021, fig. 7.52)

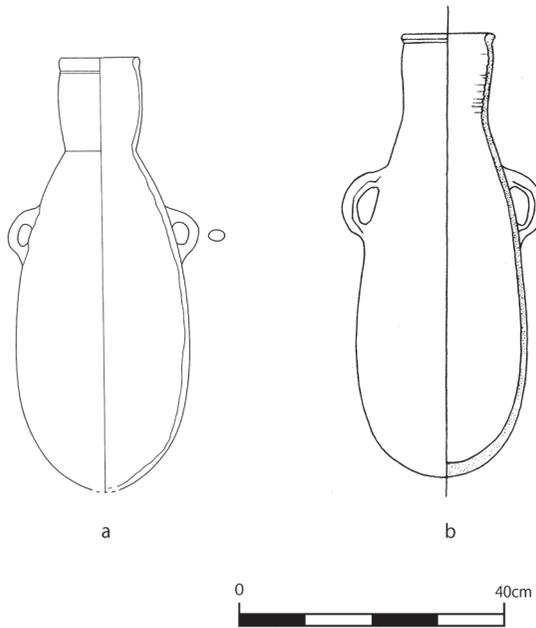


図8 寸胴形アンフォラ：タイプ4の例
(a=Aston et al. 1998, pl. 46.384; b=Anthes 1965, pl. 56.398)

る (Aston et al. 1998, pl. 46.384)。また、報告書では第22王朝と書かれているものの、メンフィスでも出土している (Anthes 1965, pl. 56.398)。詳細は未報告だがサッカラやカルナック (Karnak) でも同様のアンフォラが出土しており、後者では第3中間期のピネジエム1世の建築物の下層から出土するため、流通時期として第3中間期の直前期までを想定できる (Aston 2004: 200)。

(5) タイプ5 (図9)

テル・エル・ヤフーディヤ (Tell el-Yahudiya) ではラメセス3世からラメセス6世の治世にかけての時期に年代づけられる資料が出土しており、ホープによるとこの資料はナイルシルト製である (Hope 1989: 123, pl. 6b)。サッカラやソレブ (Soleb) でもナイルシルトのものが出土している (Aston 2011: 229, fig. vi.17.151, 152; Schiff Giorgini 1971: 194, fig. 344; Budka 2017: 118)。ディール・エル・メディーナ (Deir el-Medina) では第19王朝と第20王朝の資料が混ざった墓で出土している (Nagel 1938, fig. 17.44)。トンボス (Tombos) で出土した資料については、胎土は不明だが (Smith and Buzon 2018: 211, fig. 5)、アンフォラが出土した層の上層で第3中間期初期の埋葬が検出されていることから、第21王朝以前だと考えられる。また、サイ島ではマールA2の資料が出土しており、第20王朝に年代づけられると指摘されている (Budka 2021: 92, fig. 5.13.SAC5 260-2/2015)。以上のことから、このタイプのアンフォラは第20王朝に流通していた土器である可能性が高いといえる。

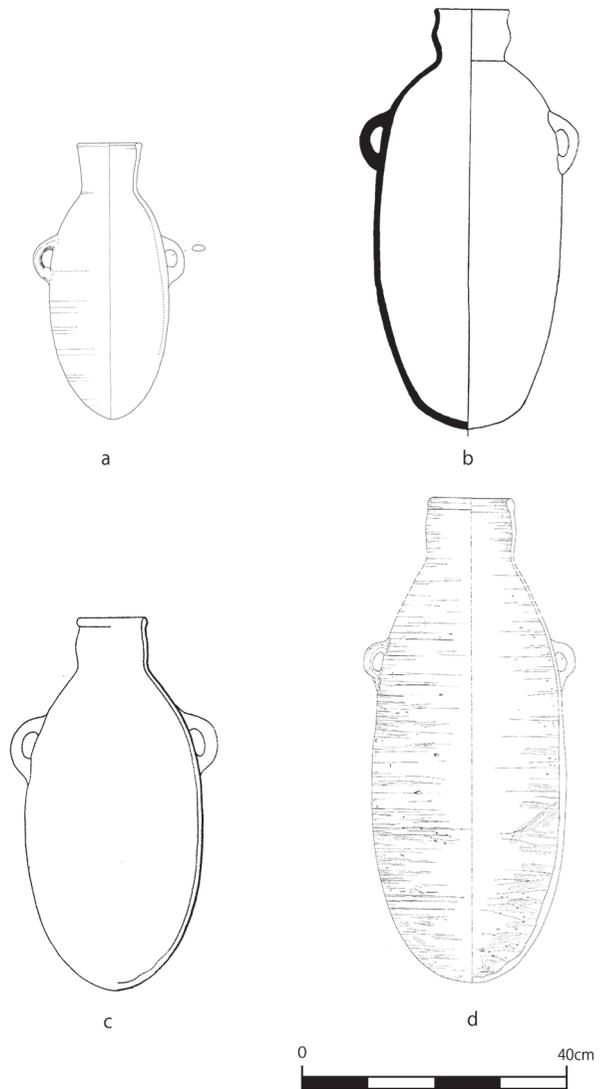


図9 寸胴形アンフォラ：タイプ5の例
(a=Aston 2011, fig. vi.17.151; b=Nagel 1938, fig. 17.44;
c=Schiff Giorgini 1971, fig. 344; d=Budka 2017, pl. xiv.3)

(6) タイプ6 (図10)

ANKEにおいて、テル・エル＝ヤフーディヤとカンティール出土資料の2点しか存在が示されていなかったタイプである。まず、サッカラのイパイ墓出土資料は第19王朝に年代づけられる可能性がある (Takenouchi and Takahashi 2021: 68, fig. 13. 82)。アブシール南 (Abusir South) で検出された、第19王朝のイシスネフェルトのエンバーミング・カシェからはマールFの資料

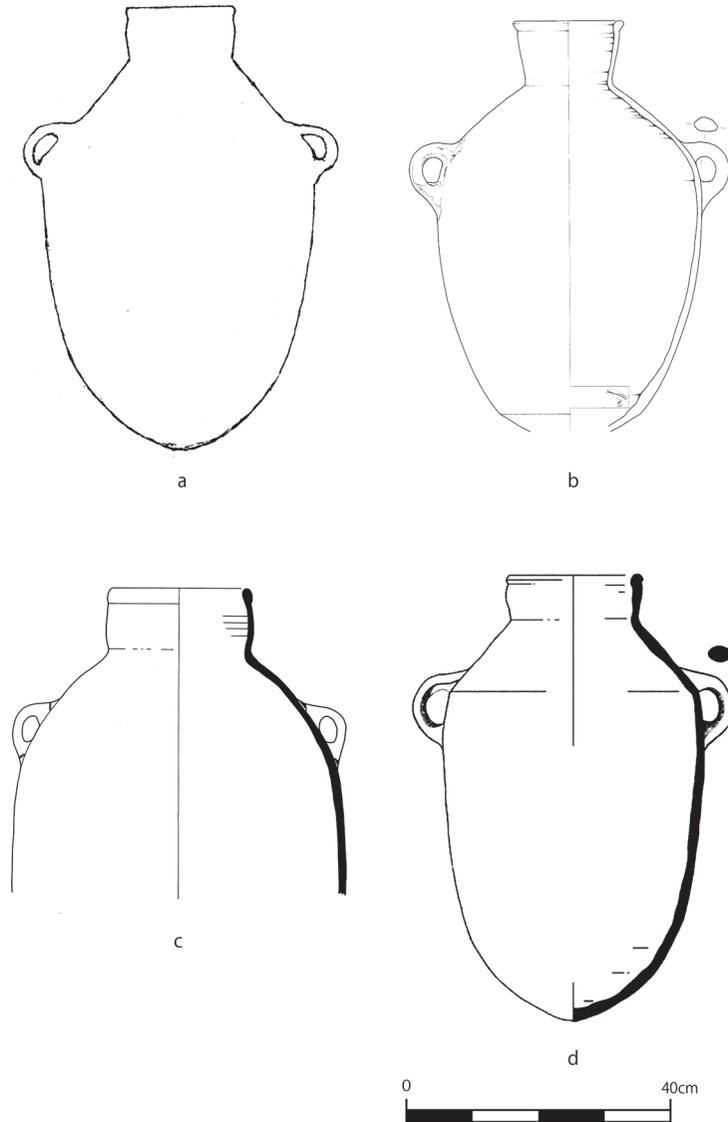


図10 寸胴形アンフォラ：タイプ6の例
(a=Griffith 1890, pl. xiv.3; b=吉村 他 2010b, fig. 23.2; c=Aston and Pusch 1999: 47. 14;
d=Waiman-Barak et al. 2012, pl. 2.1)

が出土している（吉村ほか 2010b: 55, fig. 23. 2）。実測図には表現されていないものの、写真を見ると胴部と肩部にはっきりとした境目があることがわかる（吉村ほか 2010b, pl. 18. 5）。この最古級資料から、タイプ6は元々船底形底部のアンフォラであり、そこから丸底へ変化していった可能性が指摘できる。

ANKEで挙げられていたテル・エル＝ヤフーディア出土資料の胎土については見解が分かっている。ホープはこの資料をナイルシルト製としているが、アストンはマールDだと考えている⁽⁹⁾。カンティールでは混合胎土の資料が出土している。また、このタイプの可能性があるマールA4の資料も存在するが、断片的なため確かなことはいえない（Aston 2014: 65, pl. 54. 450）。このタイプのアンフォラは、今のところ、エジプト北部で限定的に分布が見られる。

また、あまり注目されていないが、ナイル川流域外にもたらされている資料も報告されている。たとえば、レヴァントのテル・ドール（Tel Dor）ではIrla期（前12世紀後半～前11世紀前半）に年代づけられる資料が2点出土している（Waiman-Barak et al. 2012: pl. 2.1-2, tab. 2.1-2）。キプロスのピュラ・コッキノクレモス（Pyla Kokkinokremos）では、LC IIC-III A（前1200年前後）に年代づけられる資料が1点報告されている（Karageorghis and Demas 1984: 45, pl. XXI. 1952/26）⁽¹⁰⁾。

以上のことから、タイプ6の流通時期は第19王朝に遡るといえる。また、アストンはラメセス6世の治世を下限として提示しているが、このタイプの器形のアンフォラは第3中間期以降にも流通が継続すると考えられる（e.g. Aston 1999: 72, pl. 16. 523）。

6. 寸胴形アンフォラの生産に関する考察

（1）器形及び使用胎土の変遷

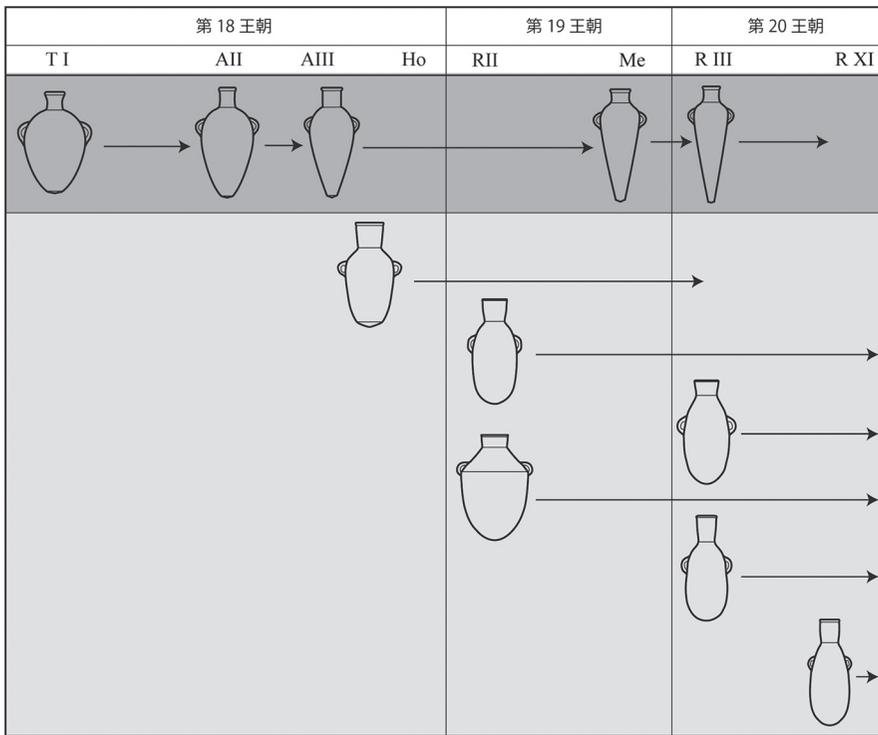
前章では本稿で設定した6タイプのアンフォラについて、近年の出土資料も踏まえて検討してきた。それぞれのタイプの流通時期・使用胎土について検討結果をまとめたものが図11で、図12では器形変化の過程を模式図として表した。検討の結果、アストンが提示したものとは異なる流通の状況が明らかになった。まず、タイプ1のアンフォラが寸胴形アンフォラの中で先行して出現することには変わりはないものの、底すぼみ形のアンフォラとの分化は、第18王朝後期、アメンヘテプ3世の治世ごろから始まっていた可能性がある。次に現れるのが、アストンが第20王朝のラメセス3世・4世の治世に位置づけたタイプ6である。実際にはラメセス2世の治世から流通しており、当初は船底形底部であった。第19王朝末ごろから、プロポーションは多様なものの、丸底のアンフォラが主流となってくる。また、本稿のタイプ6の器形がタイプ4へと変化することをアストンは指摘しているが、実際には並行して流通していたと考えられる。同様に、タイプ1のアンフォラが第20王朝にはほぼ流通しなくなる以外、器形が交代していくというような傾向は見出しづらく、さまざまな器形・胎土のアンフォラが並行して生産されている状況だっ

古代エジプト新王国時代に流通した寸胴形アンフォラに関する一考察

アンフォラ のタイプ	流通時期						胎土						
	第18王朝		第19王朝		第20王朝		ナイル シルト	マールクレイ					混合 胎土
	A III	Ho	R II	Me	R III	R XI		A2	A3	A4	D	F	
タイプ1	■		■		■					○	○	○	○
タイプ2			■		■		○	○	○	○	○		○
タイプ3					■		○	○	○	○	○		○
タイプ4						■	○		○				
タイプ5					■		○	○		○	○		○
タイプ6			■		■					△	○	○	○

A III=アメンヘテブ3世、Ho=ホルエムヘブ、R II=ラメセス2世、Me=メルエンブタハ、R III=ラメセス3世、R XI=ラメセス11世

図11 検討結果まとめ（筆者作成）



T I=トトメス1世、A II=アメンヘテブ2世、A III=アメンヘテブ3世、Ho=ホルエムヘブ、R II=ラメセス2世、Me=メルエンブタハ、R III=ラメセス3世、R XI=ラメセス11世

図12 底すばみ形のアンフォラと寸胴形アンフォラの器形変化過程模式図（筆者作成。寸胴形アンフォラ以外は ANKE を元にし、簡略化して表現している。）

たと考えられる。

また、胎土についての指摘だが、たしかにマール D の土器が減少するという傾向はカンティール以外でもサイズ (Sais) のコム・レブワ (Kom Rebwa) やメンフィスのコム・ラビアでも看

取される (cf. Wilson 2011; Aston and Jeffreys 2007)。しかし、マール D のアンフォラは第20王朝にも流通していた (cf. Michels: 2016; Vincentelli 2006)。また、マール D の寸胴形アンフォラが豊富に流通していたラムセス 2 世の治世の段階でマール A4 での生産も行われていた。実際には、寸胴形アンフォラが出現してから比較的早い段階で、南北でアンフォラ生産が行われていたと考えられる。

また、ワイン生産地の移動が寸胴形アンフォラ出現の要因として語られているが、前章で見たように、寸胴形アンフォラへの分化は第19王朝に突如として起こったものではなく、おそらくアメンヘテプ 3 世の治世頃には徐々に始まっていたと考えられる。この時期は、カナーン壺を模した器形から変化し、器高が高く、細身の底すぼみ形アンフォラへと変化していく時期とも重なる。その時期に何らかの役割の違いに応じて分化したのではないだろうか。アストンが指摘しているように、底すぼみ形のアンフォラとは別の目的で作られたというのは妥当だと考えられる。

(2) 寸胴形アンフォラ出現の背景

①寸胴形アンフォラの内容物と利用方法

では、別の目的とは一体何だったのか。基本的にアンフォラはものを輸送・貯蔵を意図する土器であるため、内容物に着目する必要がある。先述の通り、寸胴形アンフォラにはデルタ地域由来の水が入れられていた例がある。また、葬送儀礼で用いられる土器だったという見解も述べられてきた。しかし、出土資料をつぶさに見ていくと、他にもさまざまな用途で使われていたことがわかる。

まずは、ヒエラティック・ドケットだが、先行研究で強調されてきた「水」への言及以外にも、2点内容物がわかる資料がある。1つめが、ダハシュール北遺跡で出土した資料で、タイプ 1 の寸胴形アンフォラに内容物として油を意味する「メルヘト」が記されている (吉村ほか 2002)。また、ワインを入れていたと考えられる資料が 1 点ある (Aston 2008: 240, pl. 87. 1736)。ただし、ヒエラティック・ドケットが記されることは稀である⁽¹¹⁾。

土器に残された内容物の証拠にも注目する。たとえば、サッカラのイウルデフ墓出土のタイプ 1 には封泥が残っており、ピチュメンらしき黒色の物質が土器内部に確認されている (Aston 1991: 52, pl. 51. 58)。同遺跡のラモーゼ墓でも封泥が残ったアンフォラが出土しており、リネンの詰め物の下部が黒色になっていた (Aston and Aston 2001: 57)⁽¹²⁾。これもおそらくピチュメンなどの物質だと考えられる。また、テル・エル＝ヤフーディヤで多数出土したタイプ 5 には、常に青銅製「おろし金」と一緒に腐敗した野菜が入っていたことがわかっている (Griffith 1880: 45-46, pl. XIV. 5, pl. XV. 20, 21)。また、先述の通り、エンバーミング・カシェからの出土も確認されている。サッカラのティアとティア墓付近からは 3 点出土しており、そのうち 2 点にナトロロンが、1 点に茶褐色の粉が入っていた (Aston 1997: 94-96, fig. 5)。

また、第20王朝と並行する時期のキプロスのハラ・スルタン・テッケやレヴァントのテル・ドールではアンフォラがまとまって出土している (Eriksson 1995; Waiman-Barak 2014)。最終的には外部地域へ物品を輸出するための土器としてもしばしば用いられたことから、エジプトが輸出していたものを入れるのに適した器形だったと考えられる⁽¹³⁾。

以上から、寸胴形アンフォラにはアストンが強調していた「聖水」の他にも、さまざまなものが入れられていたことがわかる。出土資料から明らかになる土器の内容物は、土器が作られてから最初の内容物だったかどうかは定かではないということは念頭に置いておくべきだが、結果としてさまざまなものの輸送に使われていることは事実である。底すぼみ形のアンフォラが段々と細身になり、主にワインなどの液体を入れる容器へと発展していくにつれ、液体以外も入れられる汎用性の高い大量輸送・貯蔵用土器として寸胴形アンフォラは開発され、利用されていたのではないだろうか。

おわりに

本稿では、寸胴形アンフォラ出現の背景や器形の発展について考えるべく、ANKEで提示された内容について新規資料などを扱いながら検証してきた。アストンが示した内容と変わらない部分もあるものの、寸胴形アンフォラ生産・流通の状況について大幅にアップデートした見解をまとめられたと考えている。また、底すぼみ形のアンフォラが液体輸送に特化していくのに対し、寸胴形アンフォラはそれ以外の内容物もカバーできるアンフォラとして発展し、その発展が従来考えられていたよりも早くに起きていた可能性も指摘した。ただし、カナーン壺を模倣した器形から細身の底すぼみ形の器形と寸胴形の器形へと分化する背景についてはさらなる考察を要するため、今後の検討課題としたい。

また、今回一切触れられなかった点として、土器に残された記号、いわゆるポットマークが挙げられる。多くのアンフォラにポットマークが記されるいっぽうで、研究は進んでいないため検討の余地が大いにある。

最後に、新王国時代のアンフォラに関する研究を進めるうえでの課題も最後に記しておきたい。それは、ヒエラティック・ドケットが書かれた土器片の扱いである。アンフォラの用途を探るうえでは、どの時期のアンフォラに何が入れられていたのかを整理しなければならない。しかし、ヒエラティック・ドケットは多数報告されているいっぽうで、そのドケットが記された土器がどんな種類なのか、どんな胎土で作られているのかといった報告はされないものが多い。先述の通り、現状では寸胴形アンフォラのヒエラティック・ドケットはごくわずかに限られているが、報告されている土器片の中に、寸胴形アンフォラのもが存在する可能性もゼロとはいえない。こういった点も踏まえつつ、新王国時代の経済活動の一端を解明するべく、今後もアンフォラの検討を進めていきたい。

【注】

- (1) 古代エジプトの土器研究で広く用いられている胎土分類システムであるウィーン・システムに依拠して分類されている。
- (2) マール D は、石灰質の緻密な胎土で、デルタ地域もしくはメンフィス地域のどこかに単一の採取地があると想定されている。後述するように、アストンはデルタ地域西部にそれがあったのではないかと想定している。また、マール D とよく似ているものの、区別される胎土として、G6a と G6b がある。これらはマール D と簡単には判断しづらい。G6a は中性子放射化分析でナイルシルトに近いことが明らかになっているが、G6b と合わせて混合胎土として扱われることが多い (e.g. Aston 2020)。G6a と G6b はもっぱらアンフォラ生産に使われることが多いことから、マール D・G6a・G6b は近い場所で採取されていたと考えられている。胎土の混合に関しては、土器製作者による意図的なものとする意見 (Bourriau et al. 2000)、意図的ではなく自然に混ざっていたとする意見 (Aston 2004: 185) とがある。ただし、アストンは、現代の事例を踏まえると古代の工人はおそらく異なる粘土を混ぜていただろうと述べ (Aston 2008: 38)、見解を変更している。
- (3) ミイラ製作時に利用した物を埋納したと考えられる遺構を指す。
- (4) 本稿では、各タイプの出土例のうち、最も古く年代づけられる資料に与えられる時期を流通時期の上限とする。また、下限は最も新しく年代づけられる資料に与えられる時期とする。ただし、伝世していることが明らかな場合はその限りではない。
- (5) 口径が13cm 以上あるアンフォラの口縁部は寸胴形アンフォラのものであることが多いと指摘されている (Aston 2020: 286)。
- (6) ウィーン・システムについては注(1)を参照。
- (7) 報告では ANKE のタイプ B1 としながら、類例はタイプ B2 に該当するホルエムヘブ墓出土資料を引いている (Hummel 2014: 394)。しかし、残存部のプロポーシオンからは本稿におけるタイプ 2 だと考えられる。
- (8) 追葬される例が多いこと、エジプトでの流通とタイムラグがある可能性があることが指摘されている (Vincentelli 2006)。
- (9) この点について、アストンは特に言及していない。
- (10) エジプト製とは言及されていないものの、器形を踏まえるとタイプ 6 の寸胴形アンフォラと考えてよいだろう。
- (11) ドウラ・アブ・エル＝ナガで出土した資料には、被葬者の名前と称号が記されているものもある (Michels 2016)。
- (12) 封泥が残っている寸胴形アンフォラは、他にもダハシュール北遺跡のシャフト 125 (吉村ほか、図 19.9) やハラガ (Engelbach 1923, pl.xliv. 46j) で出土している。残念ながら、いずれの報告も内容物の痕跡については言及していない。
- (13) ちなみに、これらの遺跡ではナイル川由来の魚骨が出土しており、寸胴形アンフォラの出土年代と一致している。古代エジプトでは魚をアンフォラに入れていたということを考えると、寸胴形アンフォラが魚の輸出に使われていた可能性も想定できるだろうか。

【参考文献】

- Anthes, R.
1965 *Mit Rahineh 1956*, Philadelphia.
- Aston, B.G.
2011 "Chapter VI: The Pottery" in Raven, M.J., Vershoor, V., Vugts, M. and van Walsem, R., *The Memphite Tomb of Horemheb. Commander in Chief of Tutankhamun V: The Forecourt and the Area South of the Tomb with Some Notes on the Tomb of Tia*. Turhout. pp.191-232.
- 2020 "Chapter VII: The Pottery" in Raven, M. J., *The Tombs of Ptahemwia and Sethnakht at Saqqara*, Leiden,

- pp. 239-321.
- Aston, D. A.
- 1991 "Section 5: Pottery." in Raven, M.J., *The Tomb of Iurudef: A Memphite Official in the Reign of Ramesses II*. Leiden and London. pp.47-54.
- 1996 "Tell Hebwa IV — Preliminary Report on the Pottery" *Ägypten und Levante* 6: 179-197.
- 1997 "Section D: The Pottery." in Martin, G.T., *The Tomb of Tia and Tia*. London. pp.83-102.
- 1998 *Die Keramik des Grabungsplatzes QI Teil 1: Corpus of Fabrics, Wares and Shapes.*, Mainz am Rhein.
- 1999 *Elephantine XIX: Pottery from the Late New Kingdom to the Early Ptolemaic Period.*, Mainz am Rhein.
- 2004 "Amphorae in New Kingdom Egypt" *Ägypten und Levante* 14: 175-213.
- 2008 *The Pottery.*, Mainz am Rhein.
- 2014 *Pottery Recovered near the Tombs of Seti I (KV 17) and Siptah (KV 47) in the Valley of the Kings.*, Basel.
- Aston, D. A., Aston, B. G., and Brock, E. C.
- 1998 "Pottery from the Valley of the Kings-Tombs of Merenptah, Ramesses III, Ramesses IV, Ramesses VI and ramesses VII" *Ägypten und Levante* 8: 137-214.
- Aston, D. A. and Pusch, E. B.
- 1999 "The Pottery from the Royal Horse Stud and Its Stratigraphy: The Pelizaeus Museum Excavation at Qantir/Per-Ramesses, Sector Q IV" *Ägypten und Levante* 9: 39-75.
- Aston, D.A. and Aston, B.G.
- 2001 "Section H: The Pottery", in Martin, G.T., van Dijk, J., Raven, M.J., Aston, B.G., Aston, D.A., Strouhal, E. and Horáčková, L., *The Tomb of Three Memphite Officials, Ramose, Kha'y and Pabes*, London, pp. 50-61.
- Aston, D. A. and Jeffreys, D. G.
- 2007 *The Survey of Memphis III: The Third Intermediate Period Levels.*, London.
- Bourriau, J.
- 2010 *The Survey of Memphis IV: Kom Rabia: The New Kingdom Pottery.*, London.
- Bourriau, J., Aston, D., Raven, M.J. and van Walsem, R.
- 2005 *The Memphite Tomb of Horemheb Commander in Chief of Tutankhamun III: New Kingdom Pottery.*, London.
- Bourriau, J., Smith, L. M. V., and Nicholson, P. T.
- 2000 *New Kingdom Pottery Fabrics: Nile Clay and Mixed Nile/Marl Clay Fabrics from Memphis and Amarna.*, London.
- Brissaud, P.
- 1987 *Cahiers de Tanis I: Mission Française des Fouilles de Tanis.*, Paris.
- Budka, J.
- 2017 "Pyramid cemetery SAC5, Sai Island, Northern Sudan: An update based on fieldwork from 2015-2017." *Ägypten und Levante* 27: 107-130.
- 2021 *Tomb 26 on Sai Island: A New Kingdom Elite Tomb and Its Relevance for Sai and Beyond.*, Leiden.
- Van Dijk, J.
- 1992 "Hieratic Inscriptions from the Tomb of Maya. A Preliminary Survey", *Göttinger Miszellen* 127: 23-32.
- Engelbach, R. E.
- 1923 *Harageh.*, London.
- Eriksson, K. O.
- 1995 "Egyptian Amphorae from Late Cypriot Contexts in Cyprus." in Bourke, S. and Descoedres, J-P. (eds.), *Trade, Contact, and the Movement of Peoples in the Eastern Mediterranean: Studies in Honour of J. Basil*

- Hennessy*, Sydney, pp. 199-205.
- Griffith, F.L.
- 1890 *The Antiquities of Tell el Yahudiyeh*, London.
- Helmbold, J. and Fischer-Elfert, H-W.
- 2016 "Two-Handled Storage Jars (Amphorae) and Hieratic Dockets from Aniba (Cemetery S/SA)" in Bader, B. Knoblauch, C. M., and Köhler, E. C. (eds), *Vienna 2- Ancient Egyptian Ceramics in the 21st Century: Proceedings of the International Conference held at the University of Vienna, 14th-18th of May, 2012*, Leuven, Paris, and Bristol, pp.229-258.
- Hope, C.
- 1989 *Pottery of Egyptian New Kingdom; Three Studies*, Victoria.
- Hummel, R.
- 2014 "Chapter 8: A Report on the Ceramics Recovered from Tell el-Borg" in Hoffmeier, J. K. (ed.), *Excavations in North Sinai: Tell el-Borg I*, Indiana, pp. 364-435.
- Jacquet-Gordon, H.
- 2012 *Karnak-Nord X: Le trésor de Thoutmosis Ier. La céramique*, Le Caire.
- Karageorghis, V. and Demas, M.
- 1984 *Pyla-Kokkinokremos: A Late 13th-Century B.C. Fortified Settlement in Cyprus*, Nicosia.
- Knapp, A.B. and Domesticha, S.
- 2016 *Mediterranean Connections: Maritime Transport Containers and Seaborne Trade in the Bronze and Iron Age*, New York and London.
- Loat, W.L.S.
- 1905 *Gurob*, London.
- Michels, S.
- 2016 "Cult and Funerary Pottery from the Tomb-Temple K93.12 at the End of the 20th Dynasty (Dra 'Abu el-Naga/Western Thebes)" in Bader, B., Knoblauch, C.M. and Köhler, C. (eds), *Vienna 2 - Ancient Egyptian Ceramics in the 21st Century. Proceedings of the International Conference held at the University of Vienna, 14th-18th of May, 2012*, Leuven, pp. 403-421.
- Mysliwicz, von Karol.
- 1987 *Keramik und Kleinfunde aus der Grabung im Tempel Sethos'I. In Gurna*, Mainz am Rhein.
- Nagel, G.
- 1938 *La Céramique du Nouvel Empire à Deir el Médineh. Tome I*, Le Caire.
- Ockinga, B.
- 2004 *Amenemone the Chief Goldsmith. A New Kingdom Tomb in the Teti Cemetery at Saqqara*, Oxford.
- Peet, T. E. And Woolley, C.
- 1923 *The City of Akhenaten: Excavations of 1921 and 1922 at El-'Amarneh*, London.
- Rose, P.
- 2007 *The Eighteenth Dynasty Pottery Corpus from Amarna*, London.
- Schiff Giorgini, M.
- 1971 *Soleb II. Les Nécropoles*, Florence.
- Schreiber, G.
- 2008 *The Mortuary Monument of Djehutymes II: Finds from the New Kingdom to the Twenty-Sixth Dynasty*, Budapest.
- 2015 *The Tomb of Amenhotep Chief Physician in the Domain of Amun Theban Tomb -61-: Archaeology and*

古代エジプト新王国時代に流通した寸胴形アンフォラに関する一考察

- Architecture.*, Budapest.
- Smith, S. T.
1995 *Askut in Nubia: The Economics and Ideology of Egyptian Imperialism in the Second Millennium B.C.*, London and New York.
- Smith, S. T. and Buzon, M. R.
2018 “The Fortified Settlement at Tombos and Egyptian Colonial Strategy in New Kingdom Nubia” in Budka, J. and Auenmüller, J. (eds), *From Microcosm to Macrocosm: Individual Households and Cities in Ancient Egypt and Nubia.*, Leiden, pp. 205-225.
- Takenouchi, K. and Takahashi, K.
2020 “Chapter 8: Pottery” in Yoshimura, S. and Baba, M. (eds), *Dahshur North [II] : New Kingdom Tomb of Ipay and its Vicinity.*, Tokyo, pp. 60-89.
- Vincentelli, I.
2006 *Hillat el-Arab: The Joint Sudanese-Italian Expedition in the Napatan Region, Sudan.*, Oxford.
- Waiman-Barak, P., Gilboa, A., and Goren, Y.
2014 “A Stratified Sequence of Early Iron Age Egyptian Ceramics at Tel Dor, Israel” *Ägypten und Levante* 24: 317-341.
- Wilson, P.
2011 *Sais I: The Ramesside-Third Intermediate Period at Kom Rebwa.*, London.
- Wood, B. G.
1987 ““BA” Guide to Artifacts: Egyptian Amphorae of the New Kingdom and Ramesside Periods”, *The Biblical Archaeologist*: 50/275-83.
- Wodzińska, A.
2014 “Part II. The pottery” in Rzepka, S., Hudec, J., Wodzińska, A., Jarmużek, Ł., Hulková, L., Dubcová, V., Piorun, M., and Šefčáková, A. “Tell el-Retaba from the Second Intermediate Period till the Late Period Results of the Polish—Slovak Archaeological Mission, Seasons 2011-2012” *Ägypten und Levante* 24: 39-120, pp. 94-116.
- 吉村作治、近藤二郎、長谷川奏、中川武、西本真一
2002 「エジプト ダハシュール北地区発掘調査報告—2000年 第6次調査—」、『早稲田大学人間科学研究』第14巻 第1号、pp.49-60
- 吉村作治、河合望、柏木裕之、西坂朗子、高橋寿光
2010a 「Ⅱ. 第18次調査概要」『エジプト学研究 別冊 アブシール南丘陵遺跡第18次・第19次調査概報』第14号、pp. 14-48。
- 吉村作治、近藤二郎、河合望、柏木裕之、西坂朗子、高橋寿光
2010b 「Ⅲ. 第19次調査概要」『エジプト学研究 別冊 アブシール南丘陵遺跡第18次・第19次調査概報』第14号、pp. 49-59。